

実施状況等調査報告書

令和7年9月19日

目的	公益財団法人中島記念国際交流財団助成による2025年度留学生地域交流事業に係る実施状況等調査
調査団体	龍谷大学 (京都府京都市伏見区深草塚本町67)
事業名	環境保全型農業の実践事例を通じて自然共生型社会づくりを学ぶ 一京都府、滋賀県の地域交流を通じて一
調査団体対応者	龍谷大学 政策学部 准教授 金 紅実 仁志 小太郎
機構実施者	留学生事業部留学生事業計画課支援計画係 専門員(併) 係長 太田 賢一 係員 寺崎 祐加
調査日時	1. イベント見学:(機構実施者:太田) 令和7年9月13日(土)11時00分~16時30分 2. ヒアリング:(機構実施者:太田、寺崎) 令和7年9月19日(金)10時02分~10時43分
実施形態	1. イベント見学:対面 2. ヒアリング:オンライン(ZOOM)
<p>報告事項</p> <p>1. 事業見学について</p> <p>1) 事業名:環境保全型農業の実践事例を通じて自然共生型社会づくりを学ぶ 一京都府、滋賀県の地域交流を通じて一</p> <p>2) 参加対象:外国人留学生、地域住民(外国人除く。地域のスタッフ含む)、大学スタッフ等</p> <p>3) 参加者数:39名 ※外国人留学生14名、日本人学生15名、地域住民(外国人除く。地域のスタッフ含む)8名、大学スタッフ2名</p> <p>4) 概要: 本事業は、外国人留学生が、京都府と滋賀県で行われている環境保全型農業の事例地域を訪問し、地域団体や地域住民との共同作業や交流を通じて、地域社会が取り組む自然と共生する地域社会づくりの特徴や社会的な意義、創造的な価値を学び深く理解してもらうことを目的に実施されたものである。京都府では京丹後市大宮町三重地区・森本地区が取り組むゲンゴロウ里の米づくりを通じた地域づくりの事例を学んだ。 当日は、外国人留学生と日本人学生が入り交じり、「食の班」、「農の班」、「自然環境の班」の三つのテーマの班によるグループを作り参加した。 午前中は森本公民館にて、地域づくり団体「まんぐるわ三重・森本」のメンバーから、①三重・森本里力再生協議会活動報告、②まんぐるわ三重・森本の活動について、スライドを使った説明を受けた。地域活性化のための様々な取り組み(地元の野菜や特産品を活かした漬物やお菓子作り、毎回行列ができる軽トラ朝市等)について説明があり、学生たちは皆、熱心に</p>	

耳を傾けていた。

昼食は、地域住民の方が、現地の「ゲンゴロウ郷の米」によるカレーライスを作り、学生との交流のもと食事をした。

午後は、ゲンゴロウ郷の米を集団農営している株式会社森本アグリを訪れ、スタッフからの説明を受け施設を見学した後、水田の見学を行った。

森本アグリでは、白米から玄米まで、各種米のサンプルを用意して、お米の説明があった。

質疑応答では、学生から、「よい米はどのように分別するのか」、「この農機具は何のために使用するものか」、「ふるさと納税でお米を買う方法」について質問が出た。

さらに、三重グラウンドへ移動し、学生と地域住民が交じりグループを作ってグラウンドゴルフをし、交流を行った。参加賞としてティッシュ、ホールインワン賞としてアマゾン・ポイントカードが用意されており、大変盛り上がった。

外国人留学生にとって、大変勉強になり、かつ楽しい体験になった様子であった。

【写真】

(公民館の入口)



(座学の様子)



(森本アグリ施設の施設見学の様子)



(グラウンドゴルフの様子)



2. 実施状況等調査（ヒアリング）について

・概要：

会場の撤収作業と並行して実施した場合、龍谷大学の業務負荷が高まることが懸念されたため、イベント見学とは別の日に、オンライン形式でヒアリングを実施した。

参加者を募るための工夫として、教務課でポータルサイトにアップしたり、チラシを教務課や研究室に貼った。また、メールやラインを使って、お知らせをした。

アンケートはこれから実施するとのことで、ラインを使い、学生にアンケートへの回答を促す予定とのこと。

かつての経験から、留学生だけでグループを作らせると、まとまりがなくチームワークがうまくいかないことが多いので、日本人学生も交えたグループ作りを行った。また、日本人学生を入れると、日本語がまだ不得手な学生へのケアもしてもらえるのでよい。

農業という天候や気温に左右されるものであるため、稲刈りが予定より早まったり、なかなかスケジュールがフィックスできないことが難しい点であった。

経費について、予算は若干オーバーしたが、オーバーした分は大学の自習費で賄うとのこと。

会計報告書の提出時に添付する領収書等については、教務課においてファイリングし適切に保管していることが回答された。

本事業への要望は、「事務手続きの手引」を事業が採択されてから受け取ったが、前もって手続きについて知っておきたいので、募集の段階から提示して欲しいとのこと、手続きが分かりにくい所があったので、より分かりやすくして欲しい、窓口が事務局と機構とあり、内容によってどちらにメール等を送ればよいか迷うことがあったので改善して欲しいとのことである。

本事業が大変好評であり、学生からまた類似の体験をしたいとの要望があったため、和歌山の環境政策について学ぶツアーも企画する予定とのことであった。

(ヒアリングの様子)

